

構造化理論ベース IS 研究方法論の Bourdieu 社会理論への配置

The disposition of Structuration-theory based IS research methodology in Bourdieu's social theory

小坂 武 (愛知学院大学 経営学部)

Takeshi Kosaka (Aichi-Gakuin University)

要 旨: 情報システムの実施研究において構造化理論はその実態を捉えるための道具 (sensitizing device) として使用されてきた。本稿は、この sensitizing device を越えて、情報システム実施における変化を明示的に捉え、かつその変化の過程の簡明な表現を実現するために、構造化理論の応用を Bourdieu の類型化の概念の上に配置することで開発した記述フレームワークを提示する。

Abstract: Structuration theory has been used as a sensitizing device in the research into the implementation of information systems. This paper proposes a descriptive framework developed by making the disposition of the application of the theory on Bourdieu's notion of typifications in order to realize the explicit understanding of and the compact description of the process of changes in IS implementation.

1. はじめに

情報システムの実施研究 (以下、IS 研究) において実証主義によらない方法論の必要性が認識されてきている (Lee, 1999)。これはシステムズ決定論と主意主義にもとづく研究がこの分野で成功してこなかった現れである。

IS 研究において、非実証主義研究方法論が台頭している理由は、対象である情報システムとその開発・実施の行為が、解釈学的対象であることと関係している。情報システムは人間の感覚器官を拡大する道具ではなく、むしろそれは人間の解釈の対象である (Ihde, 1979)。また、人間の現存在そのものが解釈学的存在である (ハイデッガー, 1994)。そして Ricoeur と Gadamer は書かれたテキストだけでなく人間の行為も解釈の対象であると対象を拡張した。IS 研究において対象物と行為のいずれもが解釈の対象として捉えることができる。

これらを研究するために、Giddens の構造化理論が利用されてきた。本稿では、構造化理論を利用した IS 研究の方法論を、構造化理論ベース IS 研究方法論と仮に呼ぶ。構造化理論は IS 研究だけでなく、社会学や組織論などでも使用されているが、本稿では IS 研究分野に限った議論とする。この限定は、問題領域を狭くするというよりも、今日ではむしろ IT が社会や組織の変化と深くかかわる主要な要素であるからである。

Ihde によれば道具には透明なものとそうではないものがある。IS は透明な単なる道具ではなく、これまでに無かった不透明な道具である。しかも、それが社会や会社の変化と深くかかわることから、研究の上でも重要な対象となっている。このため、IS 研究を対象に構造化理論の応用を考察することは意味のあることと考える。

IS 研究にかかわるところでの構造化理論の応用は、Barley (1986) に始まり、そして Orlikowski (1992) で研究者の関心を集めるようになった。1994 年には DeSanctis らが適応的構造化理論 (AST) を発表した。しかし、彼らの研究は構造化理論の誤用であること指摘された。今日、構造化理論の IS 研究における応用はいくつかあるが、概して、構造化理論ベース IS 研究方法論は問題状況をセンスするものとして使用されてきている。これは Giddens が構造化理論を sensitizing device と表明していることを反映している。

構造化理論は、もともと社会理論の中では、変化を捉える理論として登場した。しかしそれは構造の再生産 (安定) を捉えるが、変化を明示的に表現できる工夫はされておられない。しかし、IS 研究では時間軸上での変化を捉えることが重要でありかつ必要である。そこで変化を明示的に表現出来るように構造化理論の応用を発展させることが必要であると我々は考える。

実証主義研究は命題の導出・証明という形式をとり、その成果である論文は命題表現を中心に完結な記述形式を採用できた。非実証主義の研究では、その成果がケース記述として発表されることが多く、それが命題記述ほどには簡潔でないことから、研究者としての読者にとって理解に時間のかかるものとなっている。本稿では、動的プロセスを捉えられるようにすることによって、副次的に記述の簡潔性も達成できると考えている。変化を明示化する構造化理論ベース IS 研究方法論を実現するために、本稿では Bourdieu 社会理論へ構造化理論の応用の配置を試みる。

2. 構造化理論と IS 研究

構造化理論が導入されるまでは、IT は一方的に組織に影響を与えるシステム決定論の要素として、あるいは逆に人間の自由な選択の対象として描かれてきた。

構造化理論が IS 研究分野で使用されることで、IT と組織との相互作用が、人々の相互行為と構造との間の弁証法を通して理解される基盤が構築された (Barley 86, Orlikowski 92, Kosaka & Fitzgerald 95)。ここで構造とは、組織体や記述されたルールではなく、人々の日々の実践の中で使用されるルールと資源をいう。構造は固定したものではなく、人々の行為の中で維持されているメンタル・トレースである。そのため、人はいかなる時も、そこから逸脱し、構造を変えうる可能性をもつエージェントとしてとらえられる。

ルールは、エージェントが言説的に述べることができるものだけでなく、意識せずして実践的に使用しているものを含む。構造化理論は単なる discourse analysis や会話分析を本来越えるものである。

Barley は、CT スキャナーの導入過程を、CT スキャナーと医師との弁証法的関係として構造化理論で分析し、医師の歴史性が、CT スキャナーと医師との関係を固有なものにする変化を捉えている。彼はその変化を捉えるために、構造と行為の間を媒介する解釈図式、便宜、規範をまとめて script としてとらえ、スピーチ分析を中心に行った。彼の図式は、変化を捉える上でスクリプトの重要性を構造化理論から導出し、構造化理論の IT 分野における応用に先鞭をつけた。

Orlikowski は、今日の IT はルールを体化するものであり、エージェントが行為を行う上で頼りにする単なる資源を越えていると主張する。ルールが資源に体化されることで、エージェントが頼りにする資源はエージェントに対して特定のルールの使用からの逸脱を困難にする。この資源は人間が作り出したものであるが、作り出された資源である IT はルールの体化によって今度は人々を支配することになる。彼女は組織と技術との間に弁証法があることを、会話分析ではなく、マクロ・レベルで構造化理論を使用することで明らかにした。

DeSanctis らは、構造には人間が行為によって維持する構造と IS が持つ構造があるとして、Adaptive Structuration Theory を提案した。彼らがいう構造とは人々の実践が IT に結果的に持ち込まれたということではなく、意図的にある種の方式を IS の中に人間が持ち込んだ機能をさしている。例えば、グループ・サポート・システム内に構築した投票機能である。

この AST はその後、Garnsey ら(1995)によって、構造の概念が構造化理論の概念から乖離して、混乱がみられるとの問題が指摘されるに至っている。なお、DeSanctis らが提案した AST はその分析が煩雑かつ仔細で、ケース全体の意味を読者に伝える力が弱いことも、このような批判に結びついていると考えられる。

このような混乱が指摘されるように、構造化理論そのものの理解が容易でないことから、概して今日までは、構造の二重性の概念のもと、状況の sensitizing device としてだけでもっぱら使用されてきている。

3. 構造化理論の原形での応用とその困難

構造化理論はもともと、Parsons らの機能主義や、主意主義などにある問題を克服するために登場した。これらでは、変化や予期せぬ展開を捉えることができなかった。これらに比較し、構造化理論は変化を捉える理論として社会学では捉えられている。しかし、それは再生産を巧く捉えるものの、変化を明示的に捉える手掛かりに欠け、IS 研究にとって満足のいくものではない。

実証主義では研究対象は外在すると考えるが、非実証主義の社会科学では、社会は構成されると考える。研究者の行為も、対象を構成する一部となり、研究者は隔離された存在ではありえない、とする構成主義の立場である。

構成主義は、Berger & Luckmann によって構築されたと考えられている。我々は、これに従い社会的現実が社会的に構成されるとの基本的姿勢をとる。Berger & Luckmann は制度が次のように生成され維持されるという。ここで、制度とは、記述されたものとは限らないことに注意を要する。

「制度化は習慣化された行為が行為者のタイプによって相互に類型化される時、常に発生する。いかにいえば、そうして類型化されたものこそが制度に他ならないのである。ここで強調しておかなければならないのは、制度的に類型化されたものの相互性ということ、そしてこの場合の類型性とは行為の類型性だけでなく、制度の中における行為者の類型性をも含むということ、である。制度を構成する習慣化された行為の類型化は、常に共有されたそれである。これらの類型化は問題になっている特定の社会集団の全ての成員に通用し、制度そのものが個々の行為と同様に個々の行為者をも類型化する。制度は、X というタイプの行為は X というタイプの行為者によって遂行されるものと想定する。」(バーガー＝ルックマン, pp.93-94)

彼らの考えは制度の発生が、行為者の類型化を常に

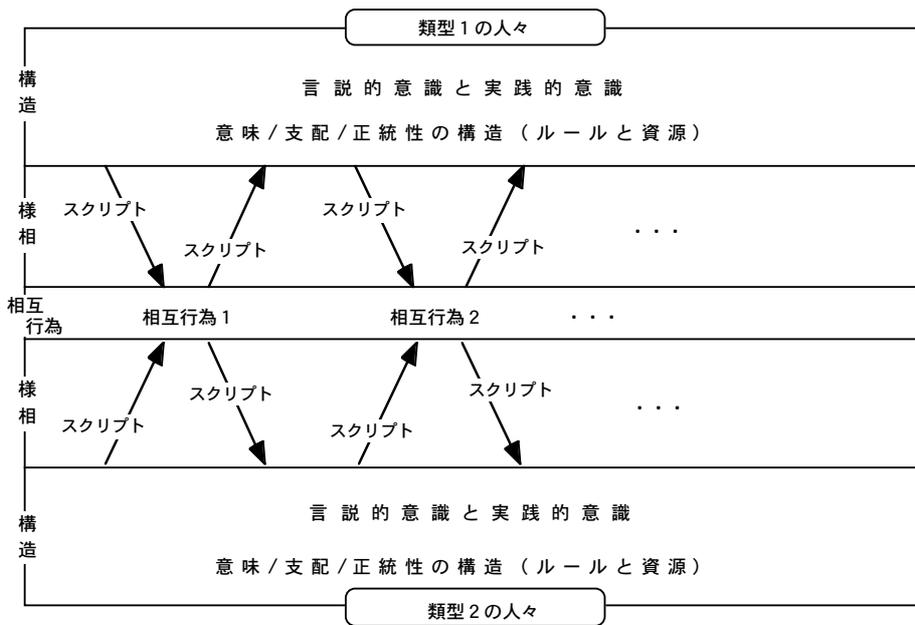


図1 解釈学的構造化の記述フレームワーク

伴うことを指摘する。社会的構築とは、複数の行為者のタイプ、つまり二人以上の人間がいるところで起こるプロセスである。

ここでの制度とは構造化理論の構造に相当する。構造は複数の人間がいるところで維持されることを、Giddensは指摘するが、それが異なる二者であることが明示的でない。変化の無い社会においては、構造の再生産は同一種類のエージェントによっても可能だと考えられるからである。しかし、我々が関心を有する分野は、開発者と利用者、コンサルタントとクライアントというように必ず二者以上のエージェントが登場する。そこで変化が起こる現実を我々は捉えたいと考えている。

再生産を越え、変化を捉えるためには、Berger & Luckmannがいう類型化、特にエージェントの類型化を構造化理論ベースIS研究方法論に明示的に結合する必要があると考えられる。

4. Bourdieu 社会理論の類型化

類型化の考えは、Bourdieuによってさらに明確に表明されている。若干のニュアンスの違いがあるものの、Bourdieuは、Berger & Luckmannの制度やGiddensの構造をハビトゥスという言葉で表現する。「ハビトゥスは構造化する構造、つまりプラチック(pratique)とプラチックの知覚を組織する構造だけではなく、構造化された構造でもある。」(Bourdieu, p.170)

そして、ハビトゥスは分類の主たる形態であると次のようにいう。

「社会的エージェントが、社会的世界についての彼らの実践的知識で実行するところの認知構造は、内部化された『身体化された』社会構造である。その中で『理にかなった』振る舞いによって前提とされる実践的知識は、分類図式（あるいは分類形態、精神的構造、象徴的形態—これら表現はニュアンスを無視すれば、事実上交換可能である。）、すなわちクラス（年齢グループ、性別階層、社会的クラス）への客観的な分割の産物である認識と評価の歴史的図式を実行する。そしてそれら図式は意識と言

説のレベルの手前で機能するものである。」(Bourdieu, p.468)

ハビトゥスは身体化された社会構造であり、言説的知識だけでなく実践的知識でもある。それは構造化理論の構造に相当する、しかしそれだけでなく、それはクラスへの分割を明示的に伴うとする。このBourdieuの考えは、構造化理論の構造で表現される場所のものが、人々の類型化とともに存在することを支持する。さらに言えば、人々の類型化が存在する場所で構造が存在するとも主張していることになる。これは我々が考える変化を捉える上での鍵となる。なお、Bourdieuの社会理論では、構造の再生産に関する論理が明示化されておらず、彼の理論のみでは我々の研究に十分ではない。

5. Bourdieu 社会理論への配置

構造は、人々についての複数の類型化が存在するところで、発生し維持され、あるいは変化すると考えられる。二つ以上の集団の間での相互作用は、二つの集団の間の相互作用に原理的に還元できることから、基本的な記述図式を、図1のように二者の間の動力学の図式とすることができる。上段に類型1の集団の構造（言説的意識と実践的意識）とスクリプト（解釈図式、便宜、規範）、下段に類型2の集団の構造とスクリプトを表現し、中段にそれらの間におこる相互行為を表現することとする。これは、Giddensがいう構造の二重性の次元をそれぞれの類型に設定し、相互行為を媒介としてそれらを接合したものである。構造は実践的意識をも含むことから、世界観 (Weltanschauung)

(ギデンズ、p.175) でもあることにここでは留意する。そして、変化は構造そのものに直接起こるのではなく、エージェントが頼るスクリプトに既存のものからの逸脱がみられるところで発生する。

変化は人々の解釈学的行為によって進展すると考えられることから、この社会的な記述図式を、我々は「解釈学的構造化の記述フレームワーク」と呼ぶ。なお、このフレームワークの適用例については本稿ではスペースの関係から省略する。適用事例は、小坂(2000)とKosaka & Suzuki(2000)にみられる。

参考文献

- Barley, S., "Technology as an Occasion for Structuring," *Administrative Science Quarterly*, Vol.31,1986, pp.78-108.
- バーガー、P. L.・ルックマン、T. 著、山口節郎訳、『日常世界の構成』、新曜社、1977.
- Bourdieu, P., translated by Nice, R., *Distinction*, Harvard University Press.1984.
- DeSanctis, G. and Poole,M.S., "Capturing the Complexity in Advanced Technology Use: Adaptive Structuration Theory," *Organization Science*, Vol.2, No.2, 1994, pp.121-147.
- Gadamer, H. G., *Philosophical Hermeneutics*, University of California Press, 1976.
- Garnsey, E.W. and Kelly, S.B., "Structuration and Enacted Social Systems," in Ellis et al. (Eds.), *Critical Issues in Systems Theory and Practice*,1995, pp.245-250.
- ギデンズ著、松尾精文他訳、『社会学の新しい方法規準』、1987.
- Giddens, A., *The Constitution of Society*, Polity Press, Cambridge,1984.
- ハイデッガー、M. 著、細谷貞雄訳、『存在と時間(上・下)』、筑摩書房、1994.
- Ihde, Don, *Technics and Praxis*, D. Reidel Publishing Company, 1979.
- Jones, M. and Nandhakumar, J., "Structured Development? A Structural Analysis of the Development of an Executive Information Systems," in Avison et al. (Eds.), *Human, Organizational, and Social Dimensions of Information Systems Development*,1993, pp.475-496.
- 小坂 武、「情報システム研究分野へのGiddens構造化理論の応用」、『経営情報学会1997年秋期全国研究発表大会予稿集』、1997.
- Kosaka, T. and Fitzgerald, G., "Structurational Analysis of Executive Information Systems between the UK and Japan," *Proceedings of the 18th ICIS*, 1997, pp.496-497.
- 小坂 武、「情報システム研究における非構造主義と構造化理論」、『経営情報学会1998年春期全国研究発表大会予稿集』、1998.
- 小坂 武、「情報システムのインタープリティブ研究の意義」、『経営情報学会1999年秋期全国研究発表大会予稿集』、1999.
- Kosaka, T. and Suzuki, S., "Discourse Gives Way to Situated Actions- In Search of a Research Framework of Hermeneutic Structuration," *Proceedings of the 11th ACIS*, 2000 (forthcoming).
- 小坂 武、「解釈学的構造化の記述フレームワーク」、『経営学研究』、Vol.9, No. 4、2000, pp.603-617.
- Lee, Allen S., "Rigor and Relevance in MIS Research: Beyond the Approach of Positivism Alone," *MIS Quarterly*, Vol.23, No.1, 1999, pp.29-33.
- Orlikowski, W. J., "The Duality of Technology: Rethinking the Concept of Technology in Organizations," *Organization Science*, Vol.3, No.3,1992, pp.398-427.
- Ricoeur, P., "Existence and Hermeneutics," in Ihde, D. (Ed.), *The conflict of interpretations: Essay in Hermeneutics*, Northwestern University Press, Evanston,1974, pp.3-24.